
IS ~ 紅と蒼を纏いし男 ~

葛綺ナガト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISと蒼を纏いし男

【Nコード】

N2312BA

【作者名】

葛縞ナガト

【あらすじ】

この小説は、100パーセント作者の趣味and妄想で書かれます。

もし、織斑一夏が存在せず、織斑千冬が一人っ子だったら？

もし、原作ヒロインズのほとんどと接点がない男がISを動かしたら？

もし、その男とISが規格外だったら？

などなど、いろいろと原作をぶち壊してますが、それでもいいという方は読んでください。駄文です。感想とかあったら書いてくれる

やんぱつこらばち。

プロローグ1（前書き）

どうも、葛縞です。がんばっていきたいと思います。

ちなみに「 ） （ 「は心の中で語っていることです。

それではどうぞ。

プロローグ1

『インフィニットストラトス』、通称『IS』。

希代の天才『篠ノ之束』により生み出されたマルチフォーマルスー
ツ。本来は宇宙空間での使用を考えられていたが、その圧倒的な戦
闘力により兵器へと利用されてしまったものである。

しかし、さすがにそんなものを使って戦争などできるはずもなく、
さらにISのコアと呼ばれるものが四六七個しかないので『アラス
カ条約』など様々な条約を受けて今では競技として受け入れられて
いる。そんなISだが、重大な問題があり、それは

『女性しか動かせない』

というものだ。これによって世界は女尊男卑へとまっしぐら。男性
たちは肩身の狭い思いをしている。
そんな中で、たった一人の例外が現れた。その一人は、ISを動か
したのである。

4

桐谷和人、一五歳、私立神崎高等学校一年生。

性格、DS。しかし身内にはとてつもなく寛容。

特技、古武術（無手同士、もしくは剣術に限れば歴代最強）。

趣味、鍛錬（常人ではついていくことは不可能）

読書（主にライトノベル）

音楽鑑賞（人には意外と言われるがクラシック）

これが俺こと桐谷和人のプロフィールといえる。ん？あきらかにチ

「トなスペックがあるだつて？そこはあれだ、俺クオリティだ。
…つていうかあの爺どもが鬼過ぎんだよ！

なんだよ！健全なる精神は健全なる肉体に宿る、故に幼いころより
鍛え上げるべし！つて。

おかげで健全とは程遠いスレた精神（自分でいうのもアレだが）だ
よ！

顔の表情にしたっていつつも眉間にしわが寄っちまってかなりきつ
いものになってるんだぜ？

あとだ、このプロフィールには一か所間違いがある。それは通って
いる高校の名前だ。

「（……………いくら俺でも、これは…、きつい）」
なぜきついのか？それはクラスの生徒全員に注目されているからだ。

し・か・も、

クラスメイトは全員『女』なのだ。

きつくないはずがない（は？楽園だだと？ちよつとこつち来い。指
導してやる）。

「（は、なんでこうなつた？）」「

それは今からひと月ほど前にさかのぼる。

プロローグ1（後書き）

お次は回想からスタートです。

プロローグ2（前書き）

やってきましたプロローグ2。
どんどん行きましょつ。

プロローグ2

ひと月ほど前、俺こと桐谷和人は高校受験に向かっていた。

「ふう。もう少しで会場だな」

俺が受ける高校はかなり名門で就職率が高い。

俺は早くひとり立ちしたかったので（ほんとは高校入学などせずにそのまま働きたかったが爺どもがそれを許さなかった）そこにしたので。

「まだ時間もあるし、コンビニでなんか買つか」

俺は近くにあったコンビニに入った。そしてその選択を俺はのちに後悔することになるのだが、その時の俺はそんなことわかるはずもなく、買い物にいそしんだのであった。

「ありがとうございますー」

コンビニ店員さんのあいさつを聞きながら外に出た俺。時間的にはちょっと急ぐべきだった。

「やべえやべえ。思ったより混んでたしな。…ん？なんかトラックが来るな？」

なんかとてつもない勢いでトラックが交差点を曲がってきた。しかもそれを追うように…。

「なんでISに追われてんだ？」

そう、ISがやってきたのだ。そのISは量産型の『ラファール・リヴァイヴ』だった。

トラックはなんとかそのラファールの攻撃をよけていたが、ついにかすめた。

それによってトラックは横転。そのトラックに積み込まれていたらしいコンテナが俺のほうに勢いよく…って！このままじゃ直撃するし！

「どわぁっと。いったいなん…」

「はははぁっ！ようやっと捕まえたぜ！」

なんかラファールを装着してるやつが言った（ついでに言うと俺は何とかコンテナを回避、ケガなくたっている）。どうやら狙いはこのコンテナらしかった。

コンテナは先ほどの衝撃で一人が入り込めるくらいの歪みができていた。しかも…。

「（あれ？なんでこんな都合よく俺のほうに歪みが向いてるわけ？）

「そう、なんでかコンテナの歪みは俺に向かって開いているのだ。

……毒食らわば皿まで。こんな状況だ。入ってみるのもいいだろう。っていうわけであっちでトラックの運転手と謎の襲撃者が言い合ってるけど気にせず俺はコンテナに入った。

研究者SIDE

私はとある企業の研究者だ。私はようやく出来上がった試作機のISを本社に運ぶ仕事をしていた。だがどういつわけか極秘のはずの情報が漏れていた。よって私は襲撃を受けたわけだが。

「くっ、貴様は何者だ！」

「はっ、そんなことに答えるわけがねえだろうが！」

ちっ、何か情報を引き出せればよかったのだが。

だが狙いは間違いなくISだろう。アレを渡すわけにはいかない。

「貴様がどこのものかは知らないが、あれだけは渡すわけにはいかん！」

「渡さなくても結構だぜ。なんせ…奪ってくからなあ！」

私が拳銃を構えても微動だにしない。

当然だ。ISにはシールドエネルギーが存在する。拳銃程度では脅しにすらならない。

「くっ、どうすればいい？」

万事休す、と思っていたその時、突然コンテナの天井が爆ぜた。

「なっ！」「」

これには私も襲撃者も驚いた。
そして気づいた時には襲撃者は吹き飛んでいた。
そのかわり、私の前にいたのは、

紅と蒼の二色に彩られた、

全身装甲のISだった。

プロローグ2（後書き）

はい、回想終了です。

サクサク行きたいところですが、あまりサクサク行くとストックが切れてしまうのでほどほどにしたいと思います。

自己紹介。 え？なにこのテンション？（前書き）

第3話目です。

けっこう原作参照とか出てきますが許してほしいです。

あとお気に入りに登録してくれた人たち、ありがとうございます。

これからもがんばりますのでどうぞご覧下さい。

では、本文スタートです。

自己紹介。え？なにこのテンション？

桐谷和人 S I D E

そんなこんなでIS動かしちまって、さらに襲撃者さえも退かせてしまったもんだから（まあ性能差がありすぎたが）さあ大変。

いろんな企業が言い寄ってきたり、マスコミには群がられるわ、そのISを作っていた企業からテストパイロットにならないかと言われたり。

いろいろとウザったいことが多かったわけですよ。

んで、とりあえずISのことを学ぶという大義名分を掲げて、この『IS学園』へと入学したのだ。

つ・ま・り、

俺はこのクラスどころか、この学校全体でたった一人の男子学生なのだ。

まさに黒一点。

……つらいんだよおおおおお！！！！

気軽に話しかけられる奴なんて誰もいないし！

みんなは俺のことをがん見してるし！！

俺がいつたい何をしたというんだああ！！！！

「……谷君、桐谷君！」

「ふえい！」

あ、やべ。絶望してて呼ばれてることに気付かなかった。俺を呼んでいたのはこのクラスの副担任『山田真耶』。試験の際にも会った。が、一つ言わせていただきたい。……この人絶対俺より年上じゃないですよ？ だって俺より背は低いし、雰囲気は完全に小動物だし。しかも今まさになんか泣きそうな顔してるんですけど。

「あ、そ、その、ごめんね？今自己紹介で、次は『き』だから桐谷君なんです。」

だからその、怒らないでくださいね？」

「いや、怒らないんで。今は単純に考え事してて話聞いてなかったからですから。」

ついでに怒ってるように見えるかもしれないが、これが俺の素の表情なんで」

「そ、そうなんですか。よかったです。それじゃお願いしますね？」

「へーい」

返事をして俺は立ち上がる。そしてクラスメイト全員を眺める。全員なんらかの顔をしてこちらを見ている。

中にはなんか敵意というか憎悪みたいな視線を感じるがまあいい。

「桐谷和人だ。趣味は鍛錬、特技は…まあ秘密だ。これからよろしく頼む。」

あと俺の表情については今山田先生に言った通りこれが素だ。気

にしないでくれると助かる」

しーんとなる。あれ？なんかしくじった？

「「「「き…「「「「

「き？」

「「「「きゃあああああああ！…！」「「「「

「（ぐあああああああああああ！…！）」（鼓膜に甚大な被害が！）

俺が軽く悶えていると…。

「なんかワイルド系！」

「それにかなりのイケメン！」

「あの目で睨まれたい、罵られたい！」

「桐谷くん、はあはあ」

おいおい、このクラスはどうなってるんだ（ついでに後半の何人がはもう手遅れっばい）。

俺が戦慄しかけていると。

ずばーん！

「…いつて…って誰だ！」

どばこーん！（威力はさつきよりも上）

「つつつつ〜」（縮こまって悶えてる）

「さつさと座らんか馬鹿者。そして先生には敬語を使え」

「あつ、織斑先生」

なんか俺にはBGMとして銅鑼の音が聞こえるんだがおかしいのだろうか？

このキリツとした感じの女性は織斑千冬。

知らない人はいないんじゃないだろうかと言える超有名人。

なんせISを使った世界大会で優勝しているのだ。

その功績により、『ブリュンヒルデ』とも呼ばれる（本人はどうもそれを嫌がっている節があるが）。ていうか、なんでこんな有名人がいるんだ？

「さて、諸君。わたしがこの一年間このクラスの担任を受け持つ織斑千冬だ。わたしの仕事はまだ何も知らない一五歳の小娘たちを……（めんどいんで省略。詳しく知りたい人は原作参照）」

へえ、この人めつきり表舞台に出なくなっと思ったら教師をしてたのか。

意外だ。

この人だつたらまだ現役でパイロットできるだろうに。

そしてなんつー軍隊まがいな自己紹介。

ここは軍ではありませんよ、織斑教官。

……軍と言えば、あいつどうなってるかな。最近文通だけだし。二年前と比べてどれくらい変わったんだろうか……？
ていうかあいつの手紙から察するに副隊長のやつのせいではいろいろと間違った方向に日本を理解しつつあるんだよなあ。

「で？なぜこのような騒ぎになった、桐谷」

「普通に自己紹介しただけです」

「ふむ…、まあいい。座れ」

言われたので座る俺。そうして続けられる自己紹介。
その間なぜか織斑先生に見られている俺。
俺、何かした？

……俺、この人苦手かも。

自己紹介。 え？なにこのテンション？（後書き）

はい、ここで切ります。

人物設定やIS設定についてはもうちょっとしてからになると思います。

予定としてはクラス代表決定戦が終わってからでしょうか？

まあ駄文だとは思いますがどうぞご鼻屑に。

ではでは。

侍ガールとの出会いと授業と（前書き）

はい、4話目です。

ここで和人君とISの規格外さがほんの少し露呈します。
ではどうぞ。

侍ガールとの出会いと授業と

SHRが終わって一限目が始まる前の休み時間。

……… 一つ訂正。俺にとっては休み時間ではない。

むしろSHRよりひどい。

なんせ他のクラスからも俺を見に来ているから。

しかも全員なんか牽制し合って話しかけてこようとしないんだよね。

うん、これ、なんてイジメ？

「（話しかけるんだったら話しかけてきてくれ〜）」

そんなことを考えていたらなんか急に騒がしくなった。

ん？なんか一人がこつちに来るんだけど。

「……… ちょっといいか？」

その子の第一印象は武士。長い髪をポニーテールにして目はきりつと吊り上り、

その姿勢は全くぶれない。うん、なかなか使い手だ。

「ああ、いいけど。えつと…」

「篠ノ之箒だ。箒でいい」

「あ、そう。んじゃ箒、俺も和人でいい。んで、ここで話すか？」

「ああ、ここでいいだろう」

篁は腕を組んで俺を見て、いや、観ている。
おそらく、趣味が鍛練と聞いてどれほどのものなのか興味があったの
だろう。

「それでだ、和人。おまえは趣味が鍛練だといったな？ 剣は使える
のか？」

「もちろん。むしろ剣術と無手同士だったら流派の歴史の中で開祖
を超えて最強って言われてる」

「ほう、それで流派名はなんというのだ？ 私は篠ノ之流だが」

「俺のほうは『残月流』だ。実践本意の殺人武術さ。」

しかも新しく生み出される武器に合わせて進化させるように開
祖の『残月則宗』が

伝えてたらしくてな。今じゃ拳銃を使った銃衝術まで確立され
てるぜ」

「残月流か。聞いたことはあるが、まさか今でも伝えられていると
は」

「ま、それがまっとうな判断さ。今時殺しの業を伝えるのが異端っ
てもんだ」

俺は肩をすくめてみせる。篁のほうは違いないというような顔をし
て苦笑している。

「篁、そろそろ授業開始だ。さっさと座らねえと出席簿が火を噴く
ぜ？」

「確かにあれは痛そうだな。さつさと座るとしよっ」

再び苦笑しつつ籌は自分の席に戻っていった。さて、俺も準備しなければ。

アレ、ほんとに痛いんだよなあ。

なんだよ、紙でできてるはずなのに、なんで竹刀より痛いんだよ。

「え〜っつとですね。ですからISとは……（省略）」

うん、一限目ですが。……結構きつい。

予習はしっかりしてきたけど、それでもやっぱり付け焼刃感がいなめない。

これはもう少し本腰を入れて勉強せなあかん。

「桐谷君、今までのところでわからないことはありませんか？」

「いえ、今のところは何とか。

わかんないところがあれば放課後にでも聞きに行くんで構わずに進行してください」

「はい、わかりました。それじゃわかんないことがあったら遠慮なく来てくださいね？」

そういつて山田先生は授業を再び進める。うん、俺ももっと頑張らないとな。

『（そうよ、和人。あなたはあたしのマスターなんだからちゃんと頑張ってもらわないと）』

『(………レスティア、授業中に話しかけんな。集中してなきゃいけないのもしんどいんだから)』

『(ぶーぶー)』

『(はいはい)』

ん？いったい誰と話してんだって？

それは俺のISのコア人格、レスティアだ。

なんか俺がISに乗り込んだ瞬間、覚醒したらしくて以来、ひまさえあれば俺に話しかけてくる甘えん坊だ。

正直こいつが覚醒してなければ俺は謎の襲撃者に叩きのめされて下手すりゃ死んでたかもしれないんで、こいつには超感謝。

こいつが覚醒してくれたからこそ、あそこまでISが強化されたっていうのがあるし、

初期化と最適化も一瞬で済んだんだよね。

『(じゃあさ、授業が終わったら話しかけてもいい?)』

『(ああ。それならいいさ。ただし、他の人が話しかけてきてるときはやめてくれよ?)』

わかってるよーと言いなながらレスティアはコア空間に戻っていった。

侍ガールとの出会いと授業と（後書き）

はい、第4話でした。

『（ ）』はISのプライベートチャンネルなどと思っててください。

次は少し人物設定を入れようと思っています。
では。

人物設定（前書き）

規格外な主人公のスペックを多少公開します。

人物設定

桐谷和人

顔つきは多少きついもののほんとは心優しい男。

ただし、心優しい分とでもいうのか、敵に対しては容赦しない。

古流武術、『残月流』の使い手。

技量に関しては剣と無手は歴代最強。開祖の『残月則宗』すら超えるのではと師匠で

ある人々から評価されている。

しかし、その修業は苛烈を極め、たとえば木刀で布を切らされたり、気配察知を高めるために山に放り出されたり、

拳句の果てには全方位から弓矢を射られたりなど。

本人は爺共マジで鬼畜と言っている。

しかしそんな修行も彼は今ではいい思い出と思っている。

IS 戦闘に関しては素人だが、対人戦に関してはエキスパートであるため、

初めてISを動かしたときでさえすさまじい戦闘力を見せつけた。

専用ISは『暁と黄昏 サンライズ・トワイライト』

レスティア

『暁と黄昏 サンライズ・トワイライト』のコア人格であり、

和人の相棒。和人がコンテナに安置されていたISに触れた瞬間に目覚めた。

性格（？）は天真爛漫、退屈を嫌がり、和人に対して甘えまくる。

戦闘では和人をサポートするAIの役割を果たす。

人物設定（後書き）

ISの細かい設定に関してはもう少し後に
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312ba/>

IS ~ 紅と蒼を纏いし男 ~

2012年1月8日00時48分発行